



正宗白鳥全集

第二十八卷

隨筆 三

福武書店



正宗白鳥全集第二十八卷

一九八四年九月二十日 印刷

一九八四年九月二十九日 發行

著者 正宗白鳥

發行者 福武哲彦

發行所 株式會社 福武書店

東京都千代田區九段南二二二一八

〒103 電話(三) 三〇一三三

振替口座(東京) 六二〇五五

印刷・製本 大日本印刷株式會社

定價 六五〇〇圓

第十三回配本(全三十卷)

(落丁・亂丁本はお取り換え致します)

正宗白鳥全集

第二十八卷

裝	編	監
丁	集	修
山	紅	井
高	野	伏
登	敏	鱗
	郎	二
	中	
	島	
	河	
	太	
	郎	
	健	
	吉	
	村	
	光	
	夫	

第二十八卷 隨筆三 目次

車窓所見	二	歌曲添削	四七
地獄極樂	三	朦朧たる心境	四八
藝術の萎縮	七	友情論	五三
机上の空論	六	最近の感想	五三
聖賢の道	三〇	ヨーロッパ追懷	五四
大學の權威變遷	三	感想	五九
獨立慾	三三	藝術表彰	六〇
藝術の黃金時代？	三四	年頭の辭	六一
奇蹟と常識	六	冬景色	六三
都會藝術	三三	胃病	六六
老若	三四	雜文帖	七一
映畫、演劇、小説法	四〇	文化擁護のためか	一〇五
世渡り上手	四二	思ひ出	一〇七

アメリカに關して	一〇九	私の昔の日記	一〇九
所感	一一四	我が生涯と文學	一一三
讀後の疑惑	一二六	八月十五日の記	一八四
年末所感	一二三	外遊回顧録	一六七
故人數人	一二五	ソ聯十日	一六七
舊作追懷	一二七	北歐の夏	一九五
私の青年時代	一二三	中歐の秋	一九九
十年間	一二五	晩秋の頃	二〇五
弔辭（徳田秋聲）	一二六	東京の五十年	二二三
就任の辭	一二九	青春らしくない青春	二六〇
貸本屋 グラツプ・ストリート	一四〇	新年の思ひ出	二六七
高原短信	一四三	新年を迎へて	二七一
高原生活	一四四	無題	二七三

少しづゝ世にかぶれて	二五	某月某日	二六
選集發刊について	二六	寂寥無限	二六
十月	二六	藝術家の死	二六
私の書齋	二六	輕信の辯	二六
高原にて	二六	自作の弱點	二六
處女作の頃	二七	秋のドライブ	二六
すべて路傍の人？	二五	身邊記	二七
不徹底なる生涯	二七	閑居妄想	二七
漱石と私	二五	圓本のことなど	二六
書齋通信	二五	明治三十年代	二六
座談會出席の記	二五	私の養生法	二六
御前座談會の記	二五	旅中の印象	二六
如是我觀	二五	我が惡口雜言	二五

受賞の日	四〇一	私の早稻田時代	四四五
私の信條	四〇二	音樂	四四九
初夢	四〇八	始めての放送	四五一
正月顔	四一〇	氷の花	四五二
小杉天外翁と語る	四二三	勝負ごと	四五六
曉の夢	四二五	どぶ泥世界	四五六
東京通ひ五六年間	四二七	アメリカを見る	四五九
天外翁と私	四三二	いとほしい夏	四九五
自然主義と私	四三二	讀書について	四九六
李白の詩	四三四	自己發見	四九八
憐れなる山羊	四三五	これも幻影か	五〇〇
幼少の思ひ出	四三六	年頭に想ふ	五〇二
卷頭言	四四二	知つたかぶり	五〇四

恐妻病

五〇六

數人の恩人

五二

輕井澤今昔

五四

解題

紅野敏郎

五七

隨
筆
三

見所窓車

眼鏡を忘れたので、新聞も本も讀めず、東京から大阪まで、終日窓外の、移り行く風景を映画の如く眺めながら暮した。時は春、風は静かで日は温かいのだから、いはゆる五十三次によつて繋がれた海道の眺めのよくない筈はなかつた。

丹那トンネルを通つてゐると、昔或る新聞が、このあたりの地質の關係から隧道工事は不可能であると力説して、屢々工事中止を勧告してゐたことを私は思ひ出した。工事が失敗してゐたなら反對者は先見の明を誇つてゐたのであらうが、何事にも傍觀者の批判は當てにならないものである。處世上敢爲の氣象は必要なので、多少危険な事でも押し通すのがいゝのであらう。

物質文明は自然美を破壊しつゝありと、明治以來識者が歎息してゐるが、私は富士山に登山電車が出来くるくらゐに

文明力がもつと發揮されたいゝのぢやないかと、白雲の上に聳えた靈山を仰ぎ見ながら感じた。「富士の白雪朝日に融けて、三島女郎衆の化粧の水」と唄はれると、靈山も神聖視されないうでなまめかしくなつた譯だが、窓外の風物に對する我々の鑑賞は徳川時代の趣味なので、若葉も落花も、農家も神社も、俳句的存在として目に映るのである。繪心のない私でも、稍々もすると廣重を聯想する癖がついてゐるから妙だ。ガソリンや石炭が缺乏して、自動車や汽車の運轉が不可能になつて、駕籠かご昇きなんか活動して廣重の好題材となることを空想するのは痴人の妄想とも云ふべきだが、人間の懷古趣味を詩であり藝術でありとして、有難がつたり獎勵したりするから面白い。

大井川の輦かた臺渡しの風景も繪として面白く、出水の川留めも文學に『朝顔日記』的趣向を與へて面白く、親代々この輦臺運搬を家業としてゐた人夫の末裔の苦心談自慢話を、かつて讀んだことがあつたが、當時の幕府が自家保存の偏見に拘泥して一般民衆の不便を顧みず、架橋を怠つたり關所を設けたりしたのだと思ふ、今日の頭で解釋して甚だ不合理である。しかし、さういふ不合理の現象が繪畫に現しては面白かつたり、不合理の世に適應するための職業が出来て、その職業の練達者が出現してそれゝに自慢し

たりするのだから面白い。

この頃は、名所古蹟、川の名山の名を記した杭が建てられてゐるので、汽車に於いても地理歴史の知識が得られてゐるが、駕籠と汽車との速力の相違だけ、フィルム廻りが早く、土地が狭く見えるため、古戦場に對しても蝸牛角上の争ひをしてゐたやうに感ぜられるのである。關ヶ原や安土の城跡から雄大豪壯な感じは傳はつて來ない。それから、嫌はれ物の廣告看板も、國產物の知識が得られて、新聞の廣告欄を読む程度の興味はある。一々次の驛名を記した廣告看板の建つてゐるのは、私には今度便利に思はれた。

地獄極樂

宗教と迷信について

私は先月大阪の美術館で、恵心僧都の『二十五菩薩來迎の圖』を觀て、昔の藝術に現れた宗教觀を冥想した。信仰の深い僧侶が比叡山あたりから湖水を俯瞰しながら幻影を浮べ、それをその時代好みの色彩を用ひて描いたので、穩和で華麗な圖面は、當時の觀覽者の心を極樂淨土の境地に誘つたのであらうが、今日の我々の目では、回顧的藝術趣味を覺えるばかりで、製作者の意識してゐた肝腎の宗教的敬虔の念はちつとも起させられぬのである。

第一、あんな菩薩人形では有難さを覺えられない。西洋の宗教畫には、峻烈悲壯なものが多いが、有名なミケランゼロの大壁畫『最後の審判』を、ローマのヴァチカン宮殿

の禮拜堂で觀た時、審判に呼び出されてゐる夥しい裸の人間が、泥鰌どろぢうがうちやうぢやしてゐるやうで敬虔の感じは起らなかった。

日本人だから、一目見て「泥鰌のやうだ。」と感じたので、多分泥鰌を知らないミケランゼロや西洋の觀覽者は、そんな聯想はしなかつたのであらう。しかし、地獄をうろろしてゐる人間を、泥鰌扱ひしてゐるとして、この大畫面を凝視してゐると、この峻烈苛酷な巨匠の人生批評宗教觀に脅嚇されるやうであつた。

愛撫と威嚇とは、宗教方面ばかりではなく、どの方面にでもあり人間の生活に絶えず感ぜられる心理作用であるが、人間は愛撫されたいために、常套的に愛撫を強調するやうに習慣づけられてゐる。キリスト教は宇宙の根本は愛の精神に在りと説いて、世界を風靡したのであるが、歐洲の歴史も、神の愛とか、神に奉仕してゐる人類の愛の現れであるかどうか疑はしい。宗教の愛の世界も人間の作り出した、一時の氣休めの夢のやうである。原始的恐怖の宗教から愛の宗教に轉じたのは非常な進歩であると云はれてゐるが、前者に一層の眞實性があり、後者はつくり物のやうな感じがする。

しかし、人間は自己の日常生活の要求から、この作りも

のを絶対眞實として珍重するので、それが我々の常識となつて、その常識から我々は脱出することが出来ない。新聞に、或る間違つた記事が掲載されたにしても、衆人がそれを其まゝ受け入れる上は、實社會に取つてはそれが眞實になり切つてゐるのである。

歴史上の事件なんか尙更の事で我々は過去の眞相は分るものぢやないと、疑ひを寄せてゐるつもりでありながら、極り切つた歴史の事件をそのまゝに信じてゐるのだ。輕信を戒めながら我々は事物に對する懷疑の念は案外淡泊で、何事をも輕率に信じる習癖を有つてゐるのだ。それだからこそ、世の中に統制が取れて秩序が保たれて行くので、強い懷疑者が多かつたら統制が破られる恐れがあるのであらう。

私も幼少の頃、地獄極樂の存在を祖母などから聞かされて、その感銘は今でも完全に心から拭はれてはゐないが、これは、さういふ事を教へた祖母などが愚昧であつたのではないので、傳統的常識になり、過去の社會生活の動力ともなつてゐたゝめなのだ。

宗教的威嚇に心應して、觀世音菩薩にでも、聖母マリアにでも拜跪して、袖に縋り膝に倚るのも、現世の強力者の威嚇に心應して、さまざまの形に於いて威嚇範圍から脱出

する態度を探らんとするのも同様の常識的心理状態である。そして、私は、自己の心に地獄極樂の幻影の宿つてゐるのを、卑俗な迷信として無視し得ないのである。

「永遠の暗黒」と「永遠の歡喜」

惠心僧都の菩薩來迎圖などは、今日では美術的感興を起させるばかりで、現世を超越した喜悅の境地へ我々を誘ふ力は何もないのだが、我々の頭脳には、色彩や文字をもつては表現し得られない地獄觀極樂觀が或ひは茫漠として、或ひは鮮明に存在してゐる。「永遠の暗黒」とか「永遠の歡喜」とか云つたやうな翻譯的現代語で云ひ現されてゐるのはそれなのだが、之等の抽象語はいくら並べても、人間の地獄極樂觀は的確に現されない。

ドストエフスキーの小説、ニーチエの哲學。或ひは、それ等の作家を解釋した評論には、「永劫」的、「永遠」的の文字が羅列されてゐて、日本の文壇でもさういふ文字や、意見に物々しく共鳴してゐるらしく見せかけてゐる人も少なくなかつたやうだが、本當は「永遠の暗黒」や「永遠の歡喜」をどう感じてゐるのか。

空々しい言葉を弄んでゐるに過ぎないやうにも思はれる

が、意識的にか無意識的にか、死後の世界に對する關心、地獄極樂觀がそこに動いてゐるのではなからうか。私などが幼少の頃に祖母などから假名文字で教へられた地獄極樂觀を、舶來の言葉でさまざまに云ひ現されてゐるやうなものだ。

「この世は假りの住居にして、永遠の住居は天の彼方にあり。」といふやうな、歐洲の中世紀の、所謂暗黒時代の長い間の人生觀は、宗教的威嚇、強權者の脅嚇に怖れてゐた人間が自己保存のために案出した思想であらうが、窮した餘りに作り出されたそんな思想であつても、文藝復興後の、文明開化時代の幾變遷を経ても消滅しないで、人間の心にこびりついてゐる。文學にもその痕跡は濃厚に残つてゐる。ダンテの研究、ドストエフスキーの研究がますます盛んであるのも、それ等研究者が、所謂永遠感なるものに魅力を感じるがためであらう。

英雄ナポレオンが、セントヘレナで病苦に悩まされ、死を眼前に控へた時、死後の世界では、ハンニバルやアレキサンダーやシーザーなどの過去の英雄に會つて、互ひに戦争の體驗を語り合ふのが樂みだと述懐したさうだが、この英雄座談會は、奈翁が病苦を紛らすための空想ではなく、死後にあり得べきことゝ信じてゐたものではあるまいか。